

織田武雄 著

古代地理学史の研究

——ギリシヤ時代——

野間 三郎

いまここに地理学史研究の専書が出たことはわが国に於る地理学の研究にとつて一つの時期のいたつたことを示すに足るものであらう。そして又それがギリシア地理学史研究をこととするという点に於て、わが国の地理学史研究に一つの時期が画されたことを考えることができる。志を同じうするものが大いに慶びとする所以である。

わが国に西洋科学としての地理学が入つた幕末以後地理学史にさげられた書物と努力は少ない。はじめは地理学が実用的知識として受入れられた趣があるから、それは止むを得ぬことであつたし、そこでは地理学史は無用ですらあつた。勿論我が国に於て独自に成長してきた地理学的思想、或は旅行、地誌或は又地図等についての研究は別である。

とに角西洋の科学の一科としての地理学は世界知識の啓蒙乃至は測量・観測又は探險などという関係諸技術の受容といった実益をその関心の中心において受入れられたのだから地理学史はどうしても裝飾的にか考えられなかつた傾きがあつた。もしその後に至つてこ

の傾きが変わる時があるとすれば、それはこの科学の受入れられ方が変わる時、即ちそれが実用乃至は他の目的に有効だというのでなくてそれ自身の為に必要が感ぜられる時であらう。即ち科学としての地理学に対する要求とその為の充分な地盤が培われた時であらう。

従来地理学史に対する要求又は態度については明治初年より近年まで著しい変化はなかつたように思われる。(日本地理学史については事情も性質もいくらか別でその伝統は当然古い。今日の所謂科学としての地理学は日本乃至は一般に東洋には発展せず、明治に西洋より輸入されたというのが如き事情にあるから) だから、漸く科学的地理学が我が国で成熟するに至つたと思われる今日に、始めて地理学史が待望せられ、又それを培うに足る地盤が成立したと考えられてよいのだと思う。

明治四十一年に三輪徳三氏が『海陸発見史』を嵩山房より出された。これは六〇〇頁を越える苦心の大冊であつたが、バンペリーの『古代地理学史』(一八七九)やビーブリーの『近代地理学の曙』(一八九七—一九〇六)などの大意を伝えるといった風があつた。この頃には博文館の帝國百科全書の類に『地理発見史』などの企画が若干あつたであらうが、それらもおおむね抄訳乃至は紹介に近いものであつたと考えてよいようである。

そのちも昭和十五年に飯本信之氏の『地理学発達史』が出るまで、殆ど単行の書の出たことを知らない。飯本氏のこの著も、自らことわつておられるようにデイクンソン『地理学の成立』(一九三三)の殆ど忠実な翻訳であつた。その他では講義案などの類は別として、大正十五年に小川琢治先生が『新日本史』(万朝報社刊)の

第三卷に地理学史篇を著わしておられる由である。これは出版の形式もそうであるが、先ずは特別の例とすべきで、大体に於て地理学史（日本地理学史は別）は研究として成立していなかったと考えてよいようである。

このような事情は昭和二三年、飯塚浩二『人文地理学説史』と、又その前後に於る同氏の著述活動によつて打破られるに至つた。しかしこの形勢もその後中絶の形に見えたが、今『古代地理学史の研究』が出ることによつて漸くこの変化が固定されたものとして受とられることになった。そうして又それが通史でなく古代研究として地理学史研究が分化の域に達したことを示す点に於て明らかに大きな意味をもつとすることができると。

古代地理学史の研究と題する本書は、古代地理学乃至は一般に地理学の歴史に於て根源的な意味をもつギリシア時代の地理学についての通観を可能にすることを意図している。従つて、その第一篇をなす十一章は、ホメロス時代の地理学（第二章）、ヘロドトス（第五章以下第九章に至る）、エラトステネス（第十三章）、とその重点をさだめ、ギリシア以前の地理学（第一章）、ギリシアにおける地理学の成立（第四章）、ヘロドトス以後に於ける地理学の発達（第十章）をはさんで、地理学の発展のそれぞれの時代的概観を与え、ギリシアの植民地の発展（第三章）、アレクサンドロス大王の遠征（第十一章、十二章）によつて地理学を増つた重大な歴史的事件の解説を加えている。これによつてギリシア時代の地理学の展開は、このエポックと、その性質と、その中心をなす潮流がその重点に於てあますところなくとらえられることになる。そのうちで多くの紙

数を費したところはヘロドトス（第五—第十章）であり、アレクサンドロス（第十一—十二章）である。これによつて著者が主として関心を注いだところが推測できる。いうところの古代に於ける地理的知識のひろがりとその性質、乃至は東西両大文明の間に横わる地域に關する知識の源流に溯ることが意図されていることを汲み知つてよいのであらう。

第二篇をなす八章はブント（第一章）およびオフィル（第二章）という伝説的航行目的地の考究と、フェニキア人（第三章）、ハンノー（第四章）、ヒミルコ（第五章）、スキュラックス（第六章）、ネアルコス（第七章）、ピュテアス（第八章）と古代に於る大航海に關連する地理学的問題の考証である。これらは古代地理学の実体をなす知識の獲得を明らかにすると同時に、又前篇と同じく古代文明の諸地域に關する知識の伝流を明らかにしようとする著者の意図が汲まれるようである。

元来ギリシア時代の地理学に關する研究は、それが地理学のみならず、科学・文化など一般に關心の深いものであるから、古来多くの研究と成書があり、今日も引つづいて活潑な研究がすすめられている。そのことは年々の『國際地理学文献目録』（Bibliographie géographique internationale, Paris 1891—）にうつみれば明らかであるし、『地理学年報』（Geographisches Jahrbuch, Gotha）に於て特に、古代世界の地誌並に民族誌につづその研究の発展を概観した部分（1880-90, von G. Hirschfeld; 1897-1911, von E. Oberhummer; 1928 von S. Weiss）を参照すればその豊富な量と広汎なテーマにむしろ一驚を喫する程であらう。

しかし通行標準の書についていえばバンベリーの『古代地理学史』(一八七九)などは古いけれどもとに角先ず指を折られるものであらう。地理学及び地理学史の専門家という立場から、より深く、すぐれた把握を示してくれる点ではキーパートの『古代地理学教程』(一八七八年)の序章があげられる。資料集乃至は通覧と文獻解題を兼ねたものとしてはジ・グリンの『古代の歴史並に地理についての資料と研究』やヘンニヒの『テラ・インコグニタ』がある。どちらにしても関係するところが甚だ広汎でとり上げられる角度も極めて多様であり、それら各方面の分野の研究の進展は絶えず旧時の研究に新しいものを加えて行かすには止まない。いまだ学問の分化の尚あきらかでない時代の問題であるから、地理学史も必然的に科学としての地理学という純粹な問題にのみとじこもるわけに行かぬ。そこにギリシア時代の地理学史研究に広汎な視野が特に要求される所以がある。

地理学史に於ては、地理学者の歴史、地理的知識の拡大の歴史(探險史)、地球の性質に関する知識の歴史(関係諸科学の歴史)、地理学の性質の変化発展に関する歴史など多くの要求がある。これは一般に他の学術の歴史にも要求される諸要素かも知れないけれども、必ずしもそうでなくて地理学の歴史に特に強くその必要が感ぜられるところとするかも知れるだろう。これらの諸要求は一般的には地理学史の重点推移の諸段階を意味することもあるが、特に古代地理学史の研究に於てはこれら諸要素はいずれも強い要求をもちつづけている。

現に近年大きな抱負をもつて出されたトムソンの『古代地理学

史』(一九四八)も専ら古代に於る地理的知識のひろがりの限界を押えることに主たる関心が注がれているし、この著者はそれが古代地理学史の眼目でなければならぬと他の場所で主張しさえする。言語学者たるトムソンにとつてギリシア、ラテンの文獻を丹念に渉獵することというのが独得の又唯一の方法であつた。ここに彼の書の特徴がある。

わが『古代地理学史の研究』の著者はこれらの要求される諸要素のいずれにも深い注意を払い重要な問題と事項を剩すなくその視野のうちに収め示している。「わが国ではまだ一つも刊行されていない」古代地理学史研究の基礎をここに確定する為の用意として当然ではあるけれども、又多大の苦心の存したところと思う。この点でこれは「古代地理学史教程」と呼んで差支えないであらう。

この周到細心な配慮と広汎な視野と新古研究の通覧を背景にした簡要な記述は、その索引を利用することによつて、これを「古代地理学史辞典」として用うることの可能性をも付与している。敬服にたえない。

本書に於てギリシア盛時の地理的知識を代表するヘロドトスが最も多く取扱われていることは又当然ではあるが我々にとつて最も多くの困難を排除してくれたものとして感謝すべき多くのものを含んでいる。地誌的諸事実の追求は甚だしい労苦を必要とするものであり、しかも地理学的知識の発展をとらえる上について最も根底的作業であるからである。著者の平淡な筆致はこれらの苦心の存するところをさりげなく通過せしめるが、これは自説をみだりに主張しない謙抑と客観性保持への厳格な態度が生み出したところのものである

らう。

第二部をなす八章は古代の航海に関する研究を集めて、この書に特異の存在価値を付与している。この続篇も又簡淡な説述のうちに、豊富な資料と独特の見解を包んで、容易にその主張を露わさない。今日に至るまでの諸説の検討と批判、その後に帰結を与えるという嚴重な態度をとられることによるのであるが、それでも尚随所に著者の創見と問題の提出を読みとるに苦しまない。ネアルコスやピテアスの研究の諸章の如きは著者の見解が最も精彩をあらわすところのものである。

この航海に関する諸研究が第二部として別置されていることから推察されるが、著者はギリシア地理学史に接近するのに東方古代文明の伝統についての関心を以てせられたのだと思われる。われわれはこれによつてアジア研究乃至は東方文明の考察に地理学の側から大きな燈火が点ぜられ、研究の新しい前進の為に礎石が据えられたことを感ずる。ひとり地理学界の慶事たるに止らぬものとすべきである。

この労作に対して、ここに謹んで敬意を表すると共に、尚つづいてローマ・中世など地理学史の未開の分野に巨斧を揮われんことを切望する。新しい光の照明をまつている問題は甚だ多い。

(A5判四五七頁 索引二〇頁 昭和三四年九月 柳原書店刊 定価一、〇〇〇円)

増淵龍夫著

中国古代の社会と国家

河地重造

著者増淵龍夫教授の名を知つてから、いつのまにか一〇年の月日がすぎている。本書にも収録された論文「漢代における民間秩序の構造と任侠的習俗」を『一橋論叢』で読んだのは、一九五一年の末であつた。そうして、その頃はじめて著者を知つたのは、必ずしもかけ出しの私だけではなかつたと思われるのであるが、にもかかわらず、ユニークな問題視角と方法、嚴密な概念の構成と駆使は、讀者のすべてに新鮮で強い印象を与えずにはいながつた。もつとも當時研究生生活一年生にすぎなかつた私には、この論文が内包していた、その後の著者の体系の展開にとつての意義を、正しく把握する力はなかつたが、それから一〇年、私たちはいま主要論文をあつめた本書を手にして、あらためて見事な研究成果とあざやかな体系の展開を、まのあたりにし得るのである。

ところでこれは書評し易いといえはし易く、し難いといえはまたし難い書物である。各章がよく知られた既発表の論文からなつているので、一々丁寧に紹介するのは、あまり適切とはいえない。このさいの有効な方法は、学界の問題状況に照しつゝ、全体を貫く独自の問題関心と方法を浮び上らせることによつて、成果の体系的検討を試みることであらう。ところが著者は、各論文を新たに補筆して